

答辞

三年間過ごした学び舎ともお別れかと思うと、時間が経つのは早いと改めて実感しました。今日で、私たち三八二名は、敬愛学園高校を卒業します。

三年前の四月、私たちは敬愛学園高校に入学しました。その時、高校生活への希望と不安が心の中で入り混じっていました。そんな私たちに先輩たちは、時には優しく、また時には厳しく私たちを支えてくれました。「私もこういう先輩になりたい」そんなことを考えていました。

この学び舎には、数えきれないほど多くの楽しい思い出が詰まっています。球技大会、敬学祭、体育祭、修学旅行などの行事はどれもクラス全体で、またクラスの枠を越えて大いに盛り上がりました。敬学祭でのクラス企画を決める際には、意見がまとまらないこともありましたが、何度も話し合いを続け、全員が納得のいくものを考えました。そのたびにクラスや学年の団結力がいっそう深まったと思います。

私の中でどの行事よりも楽しかったことがあります。それは仲間と過ごした日々の学校生活です。休み時間や放課後にクラスメイトとの何気ない会話がとても楽しかったです。それが、もうできなくなるかと思うと、どれだけ貴重な毎日であったかを、今、改めて感じました。いまこそ仲間に「ありがとう」と、この言葉を伝えたいです。

私はこの三年間で多くのことを学びました。それは仲間との助け合いや、仲間と過ごすことの大切さ、そして、何事にも諦めずに挑戦し続けることの大切さです。様々な場面で、辛くて諦めてしまいそうになり、無力な自分に泣いていたこともありました。しかしそこで諦めずに乗り越えた時の喜びは何事にもかえがたいものでした。当たり前なことかもしれませんが、だからこそ忘れてはいけないことだと思います。

今日、私たちは人生において、一つの節目を迎えました。きっとこの先の人生で大きな壁に阻まれることもあるでしょう。その時は、この敬愛学園高等学校で過ごした楽しい日々やどんな辛いことも一緒に乗り越えた仲間がいたことを思い出し、懸命に一步一步、前に進んでいきます。

私たち三八二名が、今日という日を迎えることができたのは、仲間の存在はもちろんのこと、いつでも私たちを支えてくれた家族、そして三年間指導してくださった先生方がいてくれたからです。心から感謝しています。本当にありがとうございました。

最後になりますが、私たちを含めた過去多くの卒業生が築いてきた本校の伝統を在校生に託し、そして母校である敬愛学園高等学校のより一層の発展を願って、答辞とさせていただきます。

令和二年三月一日 卒業生代表 長門航